

不登校経験者の「その後」に関する研究動向と展望

川上 知子

A Review of studies on the experience of School Non-Attendance

Tomoko KAWAKAMI

2019年11月8日受理

抄 録

本稿は、国立情報学研究所で公表されている不登校研究の「不登校を呈したその後」に着目した研究を概観し、その現状と課題について論じることを目的とした。「不登校者数」は現在も増加傾向にあり、不登校研究も、適応や支援に関する研究を中心に、継続して行われている。そして、不登校状態にある児童・生徒への支援や対応についての研究に比べ、不登校を呈した「その後」を検討した研究は少ないといえる。しかしながら、学校段階を修了し「不登校」は解消されたものの、「ひきこもり」や社会適応の困難さなど新たな形の問題として、引き続き課題を抱えている人も少なくない。本稿において不登校を呈した「その後」の研究を概観することで、不登校のその後の実態を把握し、今後の研究の展望を得ることができた。不登校を「問題」として捉えるのではなく、一つの「トランジション」として捉え、生涯発達の見点による不登校研究の必要性が示唆された。

キーワード：不登校、適応・支援、過去受容、不登校経験への意味づけ、トランジション

1 問題と目的

不登校を受け入れる高校やそれに準ずる学校、支援施設等は増えてきているものの、不登校現象の背景には多様な問題が潜み、より複雑化しているといっても過言ではない。「平成30年度児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」をみると、高等学校における不登校生徒数は52,723人（29年度49,643人、28年度48,565人）、在籍者数に占める割合は1.63%（29年度1.51%、28年度1.46%）と、わずかながら増加傾向といえる。一方、小・中学校における不登校児童生徒数も164,528人（29年度144,031人、28年度133,683人）、在籍者数に占める割合は1.69%（29年度1.47%、28年度1.35%）と、平成24年度以降増加傾向にある。また、参考の一つとして、国立情報学研究所（以下CiNii）の「不登校」というワードでの検索結果では、2019年11月現在、6,305件（2018年8月5986件、2017年6月5898件）あり、不登校現象

そのものと限らずとも、いじめ等の様々な教育的課題と複合的に述べられたものも含め、不登校研究は継続して行われているといえる。そしてその多くが不登校状態にある児童・生徒への支援や保護者・学校等の対応について論じたものであると整理できよう。

伊藤（2016）は、中学を卒業した不登校生徒たちの進学率に関して、平成5年度の65.3%から平成18年度は85.1%（「不登校生徒に関する追跡調査研究会（2014）」）まで改善されていることをうけ、義務教育段階で不登校を経験した多くの生徒たちが高校に進学し、中途退学せずに高校を卒業する生徒たちが増加していると整理しつつも、不登校経験のない生徒たちの高校進学率に比べると、まだ現状に課題があることを指摘している。また、高校生の不登校は「高校中退」「貧困」「ひきこもり」に関連するという指摘（青砥，2009；池谷，2008）もあり、その後の社会生活への移行や対人関係において、困難が生じる可能性も高く、不登校を経験した後の適応や支援についても引き続き検討する必要があることを示唆している。また、松井・笠井（2012）は、「不登校経験のある子どもたちが、その後どのような生活を送っているのか」といった調査や研究はあまり進んでいない」と指摘し、笠井（2012）は、義務教育終了後の不登校経験のある子どもたちのフォローアップ活動や継続的支援の意義についての研究等を通して、不登校経験がその後の生活にどのような影響を及ぼしているかについて考察を行っている。

これらのことから、不登校を呈した「その後」に目を向け、不登校を呈したことで彼らの実際の生活や発達の側面にどのような影響を及ぼしているかを明らかにすることは、今現在不登校状態にある児童・生徒への対応やその後の支援の在り方において、新たな視点を得ることができるのではないかと考える。その可能性を明らかにするためにも、まずは、不登校経験者のその後の適応と支援に照準を絞り研究を整理する必要があると考える。

そこで、本稿は、国立情報学研究所で公表されている不登校研究の中で、特に「不登校を呈したその後」について論じた研究の動向について概観し、今後の展望について論じることを目的とする。

2. 不登校経験者の進学先での適応に関する研究の概要

伊藤・小澤・安田・星野・福智・近兼・原・鶴岡（2013）らの整理によると、不登校経験者の進学先における予後については、定時制高校生を対象とした調査研究はあるが、調査実施の難しさもあり、データ数は十分でないとしている。また、高校生の不登校は義務教育ではないこともあり、小・中学生の不登校に比べ注目されることは少なかったといえよう。しかし、近年、高校中退、引きこもりなどの社会的事象が問題視されていることもあり、文部科学省において高校の不登校対策がさかんに議論されるようになってきた。そして、公立の高等学校でも、三部制・単位制・総合学科の定時制高校である東京都のチャレンジスクールや埼玉県のパレットスクールのように、多様な背景をもつ不登校経験者を積極的に受け入れようとする新たな学校が設立

されている。このような学校は、何らかの不安を抱えている不登校経験者にとって、新たな気持ちで学ぼうとする機会を与えているとともに、社会的なつながりをもつことができる場として、大きな役割を担っているといつてよい（伊藤・小澤・安田・星野・福智・近兼・原・鶴岡，2013）。

しかし、平成30年の児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査の国公立の高等学校における不登校の結果をみると、本年度の30.8%の生徒が、前年度から不登校状態が継続しており、単位制においては、44.3%いる。福岡・松井・笠井（2014）は、不登校や長期欠席を経験した児童・生徒のその後に着目し、不登校状態が解消したにもかかわらず、不登校を引きずっている青年たちが存在することを指摘している。このことから、不登校経験者の内面では、不登校時の状況から派生した課題が、進学先でも何らかの形で持ち越されているのではないかと考えることができよう。さらに、同調査における中途退学の状況を見ると、不登校生徒のうち27.3%は、出席日数が足りず、中途退学をせざるを得ないという現状にあり、ここ近年ほぼ同じ現象にあることも特筆すべき視点である。

「不登校に関する実態調査 ～平成18年度不登校生徒に関する追跡調査報告書」（2014）で、過去に不登校であった者のうち、平成18年度に中学3年生だった生徒の5年後を調査した結果をみると、高校を卒業したあとの就学先は、20歳現在において、大学・短大・高専22.8%、専門学校・各種学校等14.9%であった。森田（2003）も指摘している通り、不登校経験者の大学進学率は、一般的な大学進学率よりも、まだ低いといえる。しかしながら、大学をめぐる状況が変化し、全入時代と言われるようになり、興津・水野・吉川・高橋（2006）は、不登校経験者がさまざまな課題を持ち越したまま大学進学することも以前と比較すると多くなっていると指摘している。

これらのことから、不登校経験者の進学先での適応を考えたときに、義務教育終了後、または高校卒業後に、在籍できる高校やサポート校、大学等が拡充してきたことで、所属可能な場所に身を置き、見かけや肩書上は、社会的に適応しているように見えるが、不登校時の課題を持ち越し、青年期を過ごしている者も少なくないといつても過言ではない。福岡・松井・笠井（2014）は、本人も含め関わる人々、保護者においても、どこかに所属していることで、社会に適応できたと安心したり、そのうち何とかなるだろうと課題への取り組みを先延ばしにしたりすることがあると述べ、進学する、資格を得るといった表面的な社会適応だけでは十分ではないと指摘している。さらに、高校生活や課題への取り組みを先送りしている間に、年齢相応の経験を積まずに、何となく年を重ねてしまうことが、社会適応へのハードルを高くしてしまっていると危機感を示唆している。不登校になった背景やきっかけを踏まえる必要はあるが、社会に出たときに突き付けられる課題から、内的にも社会的適応を果たしているのかどうかを試され、その課題とどう向き合っていくのかは、不登校経験者のその後を左右する、一つの分岐点になるのではないかと考える。

3. 不登校経験がその後の人生にもたらす影響の概要

(1) 対人関係への影響

福岡ら（2014）は、不登校経験をもつ子どもたちの中には、人間関係に不安や脅威、不信、苦手意識などのネガティブな態度を持っていることが多いとし、その理由として、もともと持っている器質的なもの、不登校時に人間関係から離れ孤立していたことや集団の中で傷ついた体験を持つことによるなど、理由は様々であると述べている。このことから、不登校経験が対人関係にどのような影響を及ぼしているのかについて議論する際に、不登校のきっかけについても触れておく必要があると考える。岸田（2012）は、きっかけを、「直接の原因」や不登校となる「引き金になったトピック」と捉え、不登校の背景を「本当の原因」、「潜在的な要因」と整理し、区別して議論する必要があると述べている。あまりに複雑で多様化した問題を含む「不登校の背景」が、対人関係へのどのような影響を及ぼすのかについて議論することは容易ではなく、調査も少ないことから、ここでは不登校のきっかけが対人関係に及ぼす影響について事例を通して整理することとする。

平成18年度に不登校であった生徒の5年後の状況等を追跡調査した「不登校に関する実態調査～平成18年度不登校生徒に関する追跡調査報告書」（2014）の「あなたが学校を休みはじめたときのきっかけは何ですか」という質問項目に関して、「友人との関係」が52.9%、「生活リズムの乱れ」が34.2%、「勉強がわからない」31.2%、「先生との関係」が26.2%、「クラブや部活動の友人・先輩との関係」22.8%の順となっており、学校での人間関係から派生する問題をきっかけとする場合が多くを占めているといえる。また、家庭環境をめぐる問題に関する質問項目では、「親との関係」14.2%が最も高く、「家庭の不和」10.0%と続いている。人間関係の問題という観点から考えると、「親との関係」も家庭での人間関係によるものであり、学校においても、家庭においても、人間関係をめぐる問題が不登校のきっかけとして、大きな影響を与えていると整理できる。

また、森田（2003）による追跡調査で、不登校経験者に現在の課題を尋ねたところ、「人づきあい」を選択した者が41.8%と最も高かった。このことから、不登校経験者のその後の人生において、「人づきあい」は大きな課題となりやすく、興津ら（2006）が述べているように、対人関係は、不登校のきっかけにもなりうるが、回復過程においても、立ちはだかる壁となりうる重大な課題の一つであるといえよう。

興津（2006）は、不登校を経験した学生とそうでない学生との比較を通し、不登校経験に影響すると考えられる要因を調べることを目的とし、調査票を用いて研究を行った。その研究の考察によると、不登校経験者は未経験者よりも対人不信やAdapted Childが高いという結果が得られた。また、未経験者と比べて自己受容や孤独感に差が見られず、必ずしも自己卑下的ではないと考えられることから、不登校が、本人の自己評価の低さ（自信のなさ）よりも、対人関係におけるさまざまな軋轢が原因となって生じやすいのではないかと整理している。このことから、不登校のきっかけの一つが、この対人関係における軋轢であるとし、その対人関係におけるネガティ

ブな態度が克服されないまま、次の進学先に持ち越された結果、日常の不適応につながっている者も少なくないと考えられる。福岡ら（2014）は、このような状況を払拭するために、新たな人間関係の経験が望ましいとしつつも、不登校のまま卒業した者にとって、新たな人間関係を経験する場は極端に少なくなること、家族と距離ができ、自分の世界にこもりがち子どももいるなど、問題が複雑化しやすくなることを指摘している。

不登校経験の有無にかかわらず、対人関係において多くの人が、その対処法について思い悩むことである。その中で、不登校を呈したことで、対人不信がトラウマ化した場合、不登校が現象としては解消されても、そのトラウマは、解消されるまでには多くの時間を要することは言うまでもない。そのことについて、不登校の児童・生徒にかかわるあらゆる人たちは今一度、認知しておく必要があると考える。

（2）セルフエスティームへの影響

伊藤ら（2013）は、先行研究の知見からは、自尊感情の低下と不登校との間の因果関係は解明されていないとしつつ、児童生徒が不登校を経験する過程と自尊感情の低下との間には、大きな関連があると述べている。

文珠（1996 a）は、同世代の子どもは主に、不登校が人間関係から生じていると見なしており、不登校生徒を厳しく否定的に捉えていることを示唆した。さらに、文珠（1996 b）は、不登校生徒と学校生活を過ごしたことのある大学生は、不登校は怠けや学校への不適応、逃避であり、なんらかの精神的問題から生じていると捉えられている傾向があるとし、このような状況に置かれた不登校経験者にとって、学校へ復帰することや地域社会で生活することに対しても困難感をもち、強い自己否定感や卑屈感を抱かざるを得ないと指摘している。伊藤（2016）も、友達の心ない言葉に傷ついたり、部活の人間関係に疲れ果てたり、そんなきっかけで自信をなくし（自尊感情が低下し）、それが不登校につながることもあれば、その不登校という状況が自らへの評価をますます低下させるという悪循環もあると指摘している。増田・塚本（2007）は、中学生段階で不登校を経験した者としていない者のセルフエスティームを、思春期（15～18歳）、青年期（19～22歳）、成人前期（23～30歳）の発達段階別に検証することを目的とした研究を行った。RosenbergのSelf-esteem尺度の日本語版を使用し考察したところ、女子においては、不登校経験者のセルフエスティームが有意に低かったが、男子においては、差が見られないという結果を得ている。

伊藤（2013）は、中学校時代に不登校を経験した高校生を対象に行った調査について、調査内容の中から3つの項目を抜粋して論じている。「現在の“自尊感情”」「不登校という過去への認識」（「プラスだった」「マイナスだった」「どちらでもない」の三択）と「将来への自信」に注目し、まず、中学校時に不登校を経験した生徒（236人；66.1%）と非経験者（121人；33.9%）を比較してみると、〈現在〉の“自尊感情”得点に有意差は見られず、中学校時代の不登校経験という〈過去〉が、そのまま〈現在〉の“自尊感情”を規定するとはいえないことがわかった。また、不登校経験

者は、高校入学した現在、不登校という〈過去〉をどう捉えているのかについて、「プラスだった」「マイナスだった」「どちらでもない」の回答はほぼ三分された。そこで、不登校群をそのとらえ方により三分し、それらと登校群を合わせた4群で比較を行った結果、今度は群間差が大きく見られ、“自尊感情”が最も高いのは不登校プラス群、最も低いのは不登校マイナス群となり、登校群と不登校群どちらでもない群と、その中間に位置するという結果を得ている。さらに伊藤（2012）は、将来展望の一つ「将来への自信」を意味する得点でも、不登校プラス群が最も高く、登校群が最も低いという結果を得たことから、〈現在〉の自分をありのままに認め大切にできる気持ち（“自尊感情”）が、自分の〈過去〉を前向きにとらえ直すことと関連し合い、この〈過去〉を受容する気持ちと〈将来〉への明るい展望とが響き合う関係にあることを示唆している。

このことは、自尊感情が、その後の経過によって回復する見込みがあることも示唆しており、不登校経験者が過去を受容し、将来を前向きに捉え生きている力を獲得するためにも、今を生きる子どもの“自尊感情”を育てる取組みは必要不可欠である。

これらのことから、不登校経験者を取り巻く人的環境が、個人差は見られるとしても、自尊感情に何らかの影響を及ぼしてはいるが、不登校を経験したことが必ずしも自尊感情を低下させるわけではないことや、一度低下したとしても、その後の経過によって自尊感情は回復する見込みがあることも示唆された。不登校経験者が、過去をどのように整理し、不登校経験をどのような形で受容しているのかということにつながる研究として、次に「不登校経験への意味づけ」について先行研究を概観したいと考える。

(3) 不登校経験への意味づけに関する研究の概要

鑑ら（1992）は、不登校を精神的な背景を含んだ領域まで広げた予後研究に関して、以下のように整理している。「不登校（登校拒否）の医療ケースとしてとらえた、その予後としての追跡調査などの報告、あるいは、教育現場から不登校支援機関を利用した子どもたちの進路分析の意味合いの強い事例報告にとどまっている」とし、予後研究の特徴については、「予後の良否について検討している研究」、「予後を予測する指標を見出そうとする研究」、「単なる予後の状態を把握した研究」の3点に大きく分けられるとした。そこで、不登校の経験自体が予後の状態とどのように関連しているのか、不登校経験を踏まえた現状のありようについてその意味付けを明らかにしようとする研究動向を調べるために、CiNiiで「不登校、意味づけ」と検索すると16件がヒットし、調査の数としては、決して多いとは言えない現状であることがわかった。その16件の具体的なものとしては、実際に不登校経験者へインタビューをし、意味づけの過程について論じたもの（井倉、2016 他）や不登校意味づけ尺度の項目収集を行った研究（伊藤、2015）などである。これらの研究結果は、不登校経験者が、過去をポジティブに受容することを促すことにつながるものになり得ることが期待できよう。

森田（2003）が不登校経験のある中学校を卒業した生徒を対象に行った追跡調査の中で、不登校であったことがマイナスに影響したかどうかを尋ねており、「マイナス」24%、「マイナスではない」39%、「どちらでもない」35%という結果が得られている。この結果から、約60%が、不登校経験への意味が見いだせず、受容する段階に至っていないと捉えることもできよう。また、不登校を呈して失ったものとして、「人間関係（友人・信頼など）」「学校生活（学力、思い出など）」が挙げられる一方で、得たものとしては、「精神的な強さ」、「人間関係」、「ゆっくり考える時間」などが挙げられていた。

伊藤（2015）は、不登校に関する追跡調査研究会（2014）の不登校経験者の語りの内容から尺度項目を収集したものが、不登校意味づけ尺度として扱うことができるとし、その調査結果から、不登校を経験した子どもたちが、自らの経験に前向きな価値を見出し、苦しかった過去を意味づけるためには、過去に失ったものの有無や多寡より、今をどう過ごすか（今の出会いや今の頑張り）が大切であると指摘している。質的データをもとに分析した研究として、高橋（2010）は、3人の不登校経験者の語りについてPAC分析を用いて考察し、「自分の居場所を見つけること」や「友人関係を深めること」は、不登校経験に肯定的な意味づけをするきっかけとなることを示唆している。これらのことから、不登校経験を肯定的に捉えることは、自らが不登校経験への価値を見出すことであり、そのことを促すためには、他者との信頼関係づくりが必要不可欠であるといっても過言ではない。しかしながら、不登校のまま卒業した者や高校中途退学した者にとって、新たな人間関係を体験する場が少なくなりがちな現状は否めない。

その人の人生における不登校経験への意味づけは、人の数だけ存在する。そして、意味を見出せず、葛藤を続けている人も存在している。不登校の経験を経て、「人間関係」を失くしたと感じる人もいればよりよい関係を得た人もいる。このことを左右するものは何なのか、さらに深めていく必要があるように考える。

4. 不登校経験者への支援の現状

不登校経験者への支援に関する研究動向をみると、学習支援、登校支援、社会的適応を促進するための支援の大きく3つに整理できるといえよう。藤田・加藤（2012）は、私立高等学校における大学生による学習支援活動の事例を取りあげ、事例検討を行っている。杉田（2012）の適応指導教室におけるソーシャルスキルトレーニングを用いたキャリア支援プログラムの実践のように、学校への登校が難しい児童生徒を対象とした対人関係スキルを育む支援を行っている場も存在している。一方、伊藤（2009）は、定時制高校と高等専修学校における登校支援の事例を対象とし、インタビュー調査をもとに考察をした結果、学校機能と登校支援の2つのジレンマについて述べている。1つ目は、非行傾向をもつ不登校経験者と対人関係に課題を抱えた不登校経験者が同じ場で生活することにおける困難である。心理的な不安を抱えやすい生徒たちの登校を守るためには、非行傾向をもつ生徒の入学を抑えなければならず、そうなると学校

が背負うべき教育の機会均等の平等という理念に反する部分が生じてくるというジレンマである。2つ目は、教師の細かい配慮・介入によって、多くの生徒の登校が支えられる反面、学校が「温室化」し、卒業後の場とのギャップが広がり、その結果、次の進路先に適応できず、フリーターや無業となってしまう卒業生が少なからず出てしまうという困難を指摘した。これらのことから、学校の不登校経験者に対する支援のなかで生じるジレンマが明らかにされ、学校支援と社会適応への移行をつなぐ新たな支援の必要性も示唆した。

さらに福岡・松井・笠井(2014)は、12歳から18歳の不登校児童生徒および高校中途退学者の青少年を支援しているフリースペースの取り組みを調査研究し、不登校終了後の支援の意義と難しさについて言及している。大きな意義としては、不登校が在宅のいずれかである子どもたちが、フリースペースに身を置くことで所属意識を持つことができ、それが安心につながっていると述べつつ、大きな課題として、支援継続の経済的な問題と18歳を過ぎたあとのアフターケアの難しさを挙げている。つまりは、フリースペースの活動への参加は、家賃等の経費を捻出するために有償であることが多く、義務教育段階までの不登校支援の多くが無償であることと異なり、参加者や保護者にとっては、継続する上での阻害要因となり得る。これらのことから、支援をする側にも支援を受ける側にも限界があるという現実があることも否めないと述べている。

5. 今後の課題と研究展望

本稿では、不登校を呈したその後に関する研究を概観した。ここで取り上げた研究は、CiNiiのキーワード検索をもとに、簡易的な視点で概観した結果ではあるが、不登校を呈したその後の現状が整理されたと考える。不登校を呈したその後をその一部であっても知っておくことは、今現在、不登校状態にある児童・生徒への支援や対応の幅を広げることにつながるのではないかと考える。

田中(2009)は、高校入学と同時に体調を崩し不登校となった高校一年男子生徒が、やりたいことを探し、進路形成をしながら、留年しつつも再登校したケースについて報告し、「高校生の時期の不登校への対応の際には、キャリア発達を求めるアプローチも有用」と述べている。進路形成の過程で、興味・関心をもてる何かを見出すことができれば、不登校経験を肯定的に捉えなおす一つのきっかけとなり得るのではないかと考えられ、キャリア発達の視点による不登校経験の考察は、新たな視点における不登校支援の在り方を見出す可能性を秘めていると考えられよう。一方で、支援をする側ではなく、不登校を経験した本人が不登校経験を振り返るにあたって、「不登校という現象が表しているものは何か」本人やそして本人にとっての重要な他者が「捉えなおす」必要があるのではないかと考える。

福岡・松井・笠井(2014)は、不登校を経験した子どもたちが、義務教育終了後や社会に出たときに、現実的な問題に直面して悩むことについて、これまでは不登校として問題化していたものが形を変えているのではないかと指摘している。不登校を

キャリア発達上の「トランジション」と捉え、自分自身にとっての不登校経験にどのような意味があったのか、色々な出会いや出来事の中で、自分と向き合い、新たな自己構築につなげることができるのではないかと考える。そのためにはまず過去も含めた自己を受容することは必要不可欠であり、自己を受容するためには、それを支える本人にとっての重要な他者の存在もまた必要不可欠である。

ややもすると、不登校は、学校や社会において「問題」として捉えられがちである。そして多くの教師や保護者は、「不登校にしないために」といった考えに陥りやすい。その結果、不本意な登校刺激から2次的な傷つき体験を重ねている児童・生徒もいる。本稿で、不登校を呈したその後の研究の一部ではあるが概観したことで、不登校を呈したその後の適応や支援の実態を示すことができた。そして、この整理を通して、不登校という現象を「生涯発達」の視点で捉えた研究を重ねていくことが必要だと考えた。不登校に陥る背景もきっかけも多様に存在し、人の数だけ色々な状況がある。そして、不登校を経たその後の人生も、人の数だけ多様に存在するであろう。不登校状態の児童・生徒への対応について多くの研究がなされていながら、今もなおその状況が改善されない一つの要因は、不登校を「問題」として捉えているからではないかと考える。不登校を予防するという発想だけでなく、不登校を通して、児童・生徒が成長することを目指した研究を重ねることがより一層有意義だと考えてやまない。

そこで、本稿の研究展望の一つとして、不登校を呈した個人に着目し、自己構築を検討すること、つまりはアイデンティティ発達に着目し、不登校を呈したことによるアイデンティティ発達への影響について、今後研究を重ねていきたいと考える。現在、「不登校・アイデンティティ」の検索結果は14件存在し、にわかに広がりを見せているといえよう。不登校を「問題」ではなく、人生上の重要な「トランジション」と捉え、不登校という現象がもつ「発達的な意義」を検討する研究が発展していくことを期待したい。

引用文献

- 青砥恭 (2009). ドキュメント高校中退 ― いま、貧困が生まれる場所 筑摩書房
- 新井肇 (2016). 特集の趣旨 日本生徒指導学会誌, 15, 7-8.
- 福岡朋行・松井美穂・笠井孝久 (2014). 不登校を経験した若者に対する継続的支援の意義と課題 千葉大学教育学部研究紀要, 62, 301-307.
- 藤田毅・加藤誠之 (2012). 大学生による私立高等学校での学習支援活動にみる高校生の学びと学校改革への視点 人間関係学研究, 18 - 1, 33-39.
- 不登校生徒に関する追跡調査研究会 (2014). 不登校に関する実態調査―平成18年度不登校生徒に関する追跡調査報告書
- 井倉未樹 (2016). 不登校経験の語りなき―当事者の経験の意味づけとその過程― 神戸発達・臨床心理学研究, 15, 35-42.

- 池谷秀登 (2008). 生活保護現場からみる子供の貧困—自立と自己実現に向けた社会福祉事務所の支援 浅井春夫・松本伊智郎・湯澤直美 (編) 子どもの貧困 172-192. 赤石書房
- 伊藤秀樹 (2009). 不登校経験者への登校支援とその課題—チャレンジスクール, 高等専修学校の事例から— 教育社会学研究, 84, 207-226.
- 伊藤美奈子・小澤昌之・安田崇子・星野千恵子・福智直美・近兼路子・原聡・鶴岡舞 (2013). 不登校経験者の不登校をめぐる意識とその予後との関連—通信制高校に通う生徒を対象とした調査から—, 慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要, 75, 15-30.
- 伊藤美奈子 (2013). 不登校経験者の「過去」「現在」「未来」—チャレンジ高校に在籍する生徒を対象とした調査より—慶應義塾大学教職課程センター年報, 20.
- 伊藤美奈子 (2015). 不登校経験者による不登校の意味づけ—不登校に関する不登校意味づけ尺度項目の収集 奈良女子大学心理臨床研究, 2, 5-13.
- 伊藤美奈子 (2016). 学校現場で求められる“自尊感情”と不登校 日本生徒指導学会機関誌, 15, 16-23.
- 笠井孝久 (2012). 不登校を経験した生徒へのフォローアップ活動 国立オリンピック記念青少年総合センター研究紀要, 2, 1-9.
- 金子恵美子 (2016). 小中学校での不登校経験と高校における学校適応との関連—通信制高校を対象として質問紙調査から—
- 岸田幸弘 (2012). 不登校のきっかけと教師による支援, 学苑, 857, 34-45.
- 増田明美・塚本康子 (2007). 思春期における不登校経験がセルフエスティームに与える影響—発達段階にみた不登校経験者と非不登校経験者との比較 日本母性衛生学会, 47, 607-615.
- 松井美穂・笠井孝久 (2012). 不登校を経験した青年たちの育ちを抑制するもの—不登校経験の意味づけと影響—, 千葉大学教育学部研究紀要, 60, 55-62.
- 森田洋司 (2003). 不登校—その後 不登校経験者が語る心理と行動の軌跡 教育開発研究所
- 文珠紀久野 (1996 a). 不登校に関する研究—中学生がみている不登校— UTY 研究助成報告書
- 文珠紀久野 (1996 b). 不登校に関する研究—大学生からみた不登校— 山梨県立短期大学紀要, 1, 89-96.
- 文部科学省 (2019). 平成 30 年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」(速報値) について (2019 年 11 月 8 日現在)
- 野田正人 (2016). 新たな不登校児童生徒への支援を考える 日本生徒指導学会機関誌, 15, 40-47
- 興津真理子・水野邦夫・吉川栄子・高橋宋 (2006). 不登校経験者の大学への適応について 日本心理学会第 70 回大会, 73-83

- 杉田郁代 (2012). 不登校経験を持つ児童生徒へのソーシャルスキルトレーニングを用いたキャリア支援プログラム—適応指導教室での実践— マツダ財団研究報告書青少年健全育成関係, 24, 31-41
- 高橋歩 (2010). 不登校経験への意味づけに関する PAC 分析 日本教育心理学会第 52 回総会論文集, 536
- 鑪幹八郎・一丸藤太郎・森田裕司・山本雅美・吉田美穂・辻河昌登・森本千加 (1992). 登校拒否に関する社会的態度の時代的変遷—登校拒否の予後研究(1)— 広島大学教育学部紀要第 1 部 (心理学), 41
- 田中輝美 (2009). キャリア発達という視点からみた高校生の不登校事例 カウンセリング研究, 42(2), 361-368.

